

1.

播磨国風土記古代製鉄の一大生産地「讚容の里」Walk

兵庫県西播磨 佐用郡 大撫山製鉄遺跡群を訪ねて 2003.11.14.



佐用坂より 大撫山



山崎断層に沿って広がる佐用町 大撫山頂より

2003.12.31. sayou00.htm by M. Nakanishi

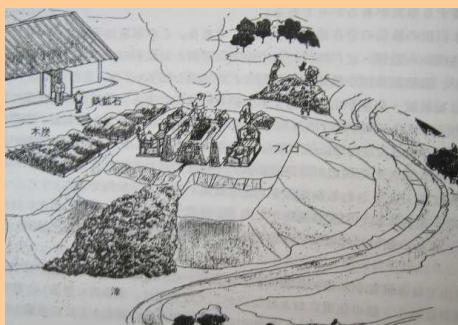
播磨国風土記(713年(和銅6年)頃)讚容の里(佐用)の項 産鉄の記事

「(鹿庭山)々四面有十二谷 皆生鉄也 難波豊前於朝廷始進也」

『 山(鹿庭山)の四面に十二の谷があるみな鉄を産する。

難波の豊前の朝廷に始めて献上した 』

【 内 容 】



1. 播磨国風土記に見る西播磨の産鉄記事と和鉄の道
2. 誉容の里 鹿庭山(大撫山)製鉄遺跡群を訪ねて
3. 「讃容の里」Walkまとめ

7世紀初頭にまとめられた「播磨国 風土記」の中の「讃容の里」の項に産鉄の記録がある。

現在の兵庫県佐用郡 兵庫県の西の端 岡山県との境 中国山地の真っ只中 中央を南北に千種川が流れる山郷。

また 中国山地の山々を東西にずらせた巨大な山崎断層が貫き、その断層に沿って中国縦貫道が通る。

中国山地を切り裂き東西に走る山崎断層と山間を縫って千種川に流れ込む佐用川との十字路が「讃容の里」今の佐用町である。

千種川の北には「製鉄神 金屋子神の降臨の地」の伝承のある岩鍋。そして、後世「千種鉄」の一大製鉄地帯「千種」南には刀鍛冶の里「長船」。

また、大陸・西日本の日本海諸国から畿内へと続く「和鉄の道 Iron Road」の中間点 それを示す播磨国風土記の産鉄の記事。古代の大製鉄地帯吉備・美作・伯耆・出雲・丹後の諸国と畿内を結ぶ十字路にあって この地は中国山地の奥深い山里ながら、四方の山々から鉄を産する栄えた古代の一大製鉄地帯であつたといふ。でも、今この地域の一角には巨大な放射光施設が座る先端科学技術の発信地

昔四面 12 の谷から鉄を産した大撫山(鹿庭山)の頂上には、日本最大のレンズを有する反射望遠鏡が座る県立播磨天文台が四方の天空をみすえる。

今「讃容の里」は星空が素晴らしい山郷 「星空の街」



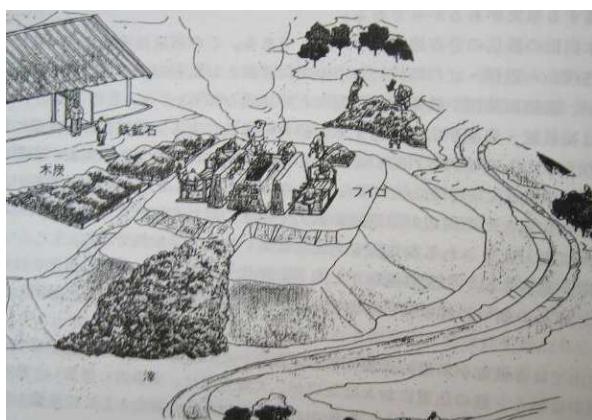
南光町下三河千種川 と「讃容の里」佐用の町を見下ろしてそびえる大撫山の谷筋と県花「野路菊」

「千種」は知っていたものあまり頭になかった佐用。千種川に沿った産鉄記録を調べようと訪れた姫路の県立歴史博物館で見つけた播磨風土記の記事。「風土記の考古学【2】播磨国風土記の巻」の「播磨の鉄」(執筆 土佐雅彦)の中に 播磨風土記 産鉄の山が周囲に古代の製鉄遺跡群を持つ現実の山として記録されていました。訪れたかった山郷『佐用』と『「4面12の谷から鉄を産した山」がその中央にどっかりと座っている』全く宛てはありませんでしたが、五万分の一の地図を頼りに 11月半ば 晩秋の『讃容の里』を訪ねました。

1. 播磨国風土記に見る西播磨の産鉄記事と和鉄の道



大撫山の南麓 佐用川山崎断層に沿って広がる佐用町 大撫山山頂より播磨の古代精鉄遺跡群



「日本で何時頃から製鉄がはじまったのか?
古代大陸から何時? どのルートで製鉄技術が伝來したのか?」

日本誕生にも大きな影響を与えたこの製鉄技術の始まりは 最古の製鉄遺跡が6世紀の半ばまでさかのぼれ、北九州 出雲・丹後 吉備 畿内・近江などが候補地として考えられているが、まだ良く判っていない。

兵庫県の西の端 中国山地から西播磨を南に流れ下る千種川上流の山間の地である千種・岩鍋は製鉄の神「金屋子神」降臨伝

承の地。千種川に惹かれてもう何年にもなる。

11月6日 千種川流域をもう一度調べたいと訪れた姫路の兵庫県立歴史博物館で

「風土記の考古学【2】播磨国風土記の巻」の「播磨の鉄」の項(執筆 土佐雅彦)
に西播磨の産鉄地域の歴史やたら製鉄遺跡調査がレビューされ、忘れかけていた播磨国風土記の産鉄記事に再度接しました。

奈良時代の初頭和銅6年(713年)撰進の命で作られた各國の「風土記」は和鉄誕生を考える貴重な資料。
現存する播磨・常陸・出雲の風土記の中に「産鉄」の記事があり、播磨国 風土記には吉備・美作・伯耆に接した播磨の西の端の山間地帯での産鉄の記事がある。

中国山地から南へ播磨を流れ下る「千種川」と「揖保川」流域の山間部である。

今まであまり気にしていなかった千種川に流れ込む佐用川流域の山間部に大きな製鉄遺跡群がある。

その中心が佐用町古代の 「讃容の里」

播磨風土記にみる播磨の産鉄記事

【播磨国風土記 讚容の郡(佐用郡)の項】

◆ 讚容の里

讚容というわけは、大神妹背二柱の神がさきをあらそって国を占められた時、妹玉津日女命が鹿を生け捕つて寝ころがし、その腹を割いてその血にひたして稻をまかれた。

すると一夜のあいだに苗が生えたので、直ちにそれを取って植えさせた。

ここに大神は勅して「あなたは五月夜に植えなさったのか」と仰せられ、すぐさま他の処に去ってしまわれた。

だから五月夜の郡とよぶ。神を贊用都比売命と名づける。

現在も讚容町田がある。すなわち鹿を斬りさいた山を鹿庭山とよぶ。

山の四面に十二の谷がある。みな鉄を産する。難波の豊前の朝廷に始めて献上した。

その鉄を発見した人は別部犬で、その孫らがこれを献上し始めたのである。

【播磨国風土記 宍禾の郡(宍粟郡)の項 (抜粋)】

◆ 柏野の里 敷草の村(千草)

草を敷いて神の御座所とした。だから敷草という。

この村に山がある。その南方十里ばかりのところに沢がある。広さは二町ばかりある。

この沢に菅が生え、笠を作るのに最適である。ヒノキ・スギ・栗・オウレン・黒葛などが生える。

鉄を産する。狼・熊が住む。

◆ 御方の里(一ノ宮町)(抜粋)

大内川・小内川・金内川 大きい方の川を大内といい、小さいのを小内と称し、鉄を産するのを金内と称する。

その山にはヒノキ・スギ・黒葛などが生える。大神・熊が住む。

平凡社 東洋文庫 『風土記』 吉野裕訳より

「(鹿庭山)々四面有十二谷 皆生鉄也 難波豊前於朝廷始進也」

「 山(鹿庭山)の四面に十二の谷がある。 みな鉄を産する。

難波の豊前の朝廷に始めて献上した 」

「山全体が鉄の山・・・????????」これは凄い

歴史博物館で見た「播磨の鉄」では播磨風土記に記載された「鹿庭山」が佐用町の中心にそびえる「大撫子山」。この山の周りに沿って流れる佐用川・千種川流域に幾つかの古代の製鉄遺跡群があり、この流域一体が古代の一大製鉄地帯である事が調査レビューとともに記載されていました。

早速 国土地理院の地図に場所の書き込みチェック。
山また山の中 果たして今も製鉄遺が残っているだろうか・・・

地図で見ると大撫山には県立西播磨天文台とドライブウェイが伸び、「四面十二の谷」との記述どおり、高くはないが、周辺はみんな山。山だけ見ることになるかもしれないが、それも良し。どんな山か興味深深。うまく行けば 古代の製鉄遺跡にも行けるかもしれない。

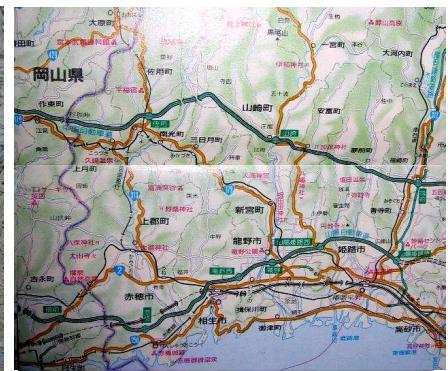
地図をにらみながら、何度となく訪れた「千種・岩鍋」のイメージをこの西播磨「讃容の里」に重ねながら、イメージを膨らませました。



播磨の古代製鉄遺跡群



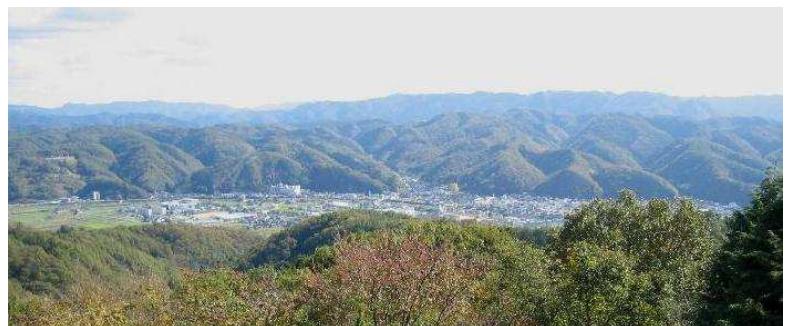
古代風土記の産鉄記事「讃容の里」と製鉄遺跡群



兵庫県播磨地方の概略



佐用坂より 大撫山



山崎断層に沿って広がる佐用町 大撫山山頂より

西播磨では中国山地が海岸地まで延び、山深い郷を形成している。

古代 畿内の周縁部にあたり、製鉄技術伝来の候補地のひとつ吉備地方(美作・備前・備中・備後)と密接な交流を有していた。

北から南へ流れ下る千種川上流域の宍粟郡千種・岩鍋は「古代製鉄の神 金屋子神 降臨の地」の伝承地。また、千種川が流れ下る河口近くには備前長船の刀鍛冶の郷がある。

千草の北 但馬 氷ノ山の麓の街道筋にも何度も見かけたたら遺跡の標識。
西播磨は古代からの産鉄の郷。

この千種川水系の佐用川と千種川が中国山地をながれくだり、巨大な東西に走る山崎断層にぶつかるところが佐用町。

正確には中国山地から流れ下ってきた千種川と佐用川は断層にぶつかり、断層に沿って東西に方向を捻じ曲げられ、断層を抜けた南で合流してまた南へ流れ下る。

千種川と佐用川が合流する手前の佐用川沿いの街が古代に編纂された播磨国風土記に産鉄の記事がある「讚容の里」佐用町である。

この「讚容の里」の北側に連なる壁としてそびえる山の中央に4面12の谷すべてから鉄を産する山 旧名「鹿庭山」と称する「大撫山」がある。

北の中国山地より深い山間をぬって南北に流れ下る二つの大河「千種川と揖保川」の流域に形成された西播磨。この山間の地は古代西から東へまた北の日本海沿岸から南へと大陸と日本を結び幾多の産鉄の民が往来し、日本に製鉄技術をもたらした和鉄の道があったに違いない。

でも神戸から出かけると通いなれた千種よりもさらに山深い郷というのが私のイメージ。

長い間静かな山里であったこの千種川流域では、今山崎断層に沿った狭い谷間に中国自動車道が東西に貫き、千種川に沿って智頭急行線が南北に開通。さらに鳥取から佐用を通って竜野を結ぶ横断高速道路も一部開通。佐用町の南の千種川と揖保川にはさまれた丘陵地には播磨科学公園都市が整備され、その中に設置され「放射光」施設が数々の新しい微量分析での成果をあげている。また、佐用町には県立西播磨天文台が設置され、日本最大の反射望遠鏡が設置されるなど山深い郷に変わりないが、新しい街へ急速に変貌しつつある。神戸に帰ったら 一番先にゆっくり 山里を歩きたい場所でした。



播磨の鉄 佐用町周辺の古代製鉄遺跡群



西下野製鉄遺跡群近傍 千種川

「山全体が鉄の山・・・・?????????」 これは 激しい
古代 西播磨の山里「讚容の里」には 吉備地方や出雲など日本海諸国と畿内を結ぶ「和鉄の道・Iron Road」があった。中国山地の山また山の中 果たしてこの山間の町に製鉄遺跡はのこっているだろうか・・・

大撫山にはドライブウェイが伸び、県立西播磨天文台と広い公園になって 「星空の町」のベース基地になっている。「四面十二の谷」との記述どおり、高くはないが、周辺はみんな山。そして、狭い谷あいをぬって佐用川が流れている。

山だけ見ることになるかもしれないが、それも良し。

佐用川に沿って大撫山の山裾をその痕跡をイメージしながら歩いてみよう。

11.14.地図を片手に秋晴れの朝 佐用町 大撫山へ出かけました。

2. 讀容の里 鹿庭山(大撫山)製鉄遺跡群を訪ねて

兵庫県佐用町 203.11.14.



大撫山から西側佐用町を望む。 2003.11.14

佐用町全景 大撫山より 2003.11.14.

【内 容】

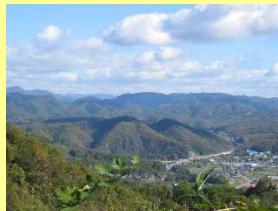
- 2.1. 山崎から千種川流域の佐用へ
 - 千種川沿いに拡がる南光町三河製鉄遺跡群と西下野製鉄遺跡 -
- 2.2. 佐用町の中央にそびえる古代製鉄の一大生産地 大撫山
 - 今は頂上に西播磨天文台 -
- 2.3. 大撫山 南面の谷にある永谷製鉄遺跡
- 2.4. 佐用川沿いの大撫山製鉄遺跡群を訪ねて
 - 播磨風土記「讀容の里」Walk -



国道 179 より 大撫山



大撫山頂上近傍



大撫山より南面とその麓にある永谷製鉄遺跡



2.1. 山崎から千種川流域の佐用へ

-千種川沿いに拡がる南光町三河製鉄遺跡群と西下野製鉄遺跡-



山崎-南光町間の峠道 2003.11.14.

11.14. 秋晴れの早朝 久しぶりに三木から加古川を横切って加西へ。

加西からは中国自動車道に沿って山裾を通って 揖保川を渡ると山崎。

ここは、攝津・播磨から美作や因幡・出雲へのちょうど中間点にあり、四方からの道が交差し、山深い中国山地へ分け入る要衝の地。

山崎の街中を通るのは4,5年ぶりであるが、西南の丘陵地を切り開いて播磨科学公園都市が出来た事や、中国自動車道を中心とした交通整備により、周辺の山間地の開発が進んだの

だろう、以前よりも随分街が大きくなつた様な気がする。

南の竜野から揖保川沿いに鳥取へ向かう因幡街道を山崎の街中で横切り、街中を通り抜け、中国縦貫道に沿って西に向かうといよいよ奥深い山中。

山崎断層が中国山地を左右に切裂き、山間の狭い回廊を東西に作り、佐用町への道がこの回廊の中につづいている。

吉備・美作・伯耆の国に隣接して中国山地に点在する西播磨の古代から的一大製鉄地帯に入つてゆく。

もう 佐用町まで大きな町なし。交通量も激減し、良く手入れされたスギ林が続く山中を南光町へ向かう。

切窓峠を越えると揖保川の流域から、いよいよ千種川の流域に入る。相変わらず、狭い谷あいの道が続く。

山崎から約30分ほどで山間の小さな集落下三河の三叉路に出る。

前方に立ちはだかっている山裾を千種川が流れ、川に沿って北へ行くと千種 南へ行くと佐用である。



山崎-南光町間の峠道 2003.11.14.

下三河の三叉路を南に折れて千種川に沿って佐用に向かう。

千種川が直角に西にまがり、正面にトンネルから抜け出した赤い高架橋が見えると西下野の集落。

この千種川に沿って両岸に約30を超える古代の製鉄遺跡があり、南光町三河製鉄遺跡群と呼ばれている。



山崎から佐用へ 西下野製鉄遺跡近傍



千種川 南光町 下三河付近

この西下野には次ぎのような「たら製鉄」に関係した昔の盆踊り唄が伝わっているという。

嫁にゆくなら 下野にござれ
下野山かけ 朝寝床 (省略)
金もあるある 金谷の段に
ほしくば やるぞ 掘って取れ (省略)
金の鳥鳴く その声聞けば
やがて長者に なるそな (省略)

—「兵庫史を歩く」より —

人っ子一人いない静かな集落。

もう こんな盆踊り唄も消えてしまったのか……

両側から山が迫る狭い谷あいを川に沿って歩く。

まっすぐに見通せる狭い谷筋に清流の千種川が流れ、緑の山肌をワインレッドの高架橋が走る。

ゆっくり風来坊するにはもってこいの場所である。

対岸中国縦貫道のむこうの山裾が奈良時代初頭の西下野製鉄遺跡と思われるが、どこも全く判らない。



南光町西下野左側 2023.11.14.
千種川の対岸山麓に西下野製鉄遺跡がある



西下野 中国縦貫道と千種川 対岸の山裾の谷に西下野製鉄遺跡がある 2003. 11. 14.

やつと道路沿いの民家のおじいさんを見つける。 製鉄遺跡のことを聞くと、すぐ前の田圃も川向こうの山裾もみな製鉄遺跡跡だという。

地図を見せながら西下野製鉄遺跡の位置を聞く。

脇道の橋を渡って中国縦貫道くぐり 細い道を藪の中を山肌に沿って少し登ったところ。

教えてもらったとおり、中国縦貫道のトンネルを抜け、山裾を少し登ったところに広場があり、階段状に谷あいが何段か聖地された林になっている。

その奥に炭焼きか何かの建物が建っている。

位置的にはここが西下野製鉄遺跡の位置なのだが、どうもはつきりしない。



三河製鉄遺跡群の点在する千種川 西下野近傍



千種川南岸 西下野製鉄遺跡 ??? 2003. 11. 14.

この千種川に沿った山間にはいくつもの古代製鉄遺跡があり、古代ばかりでなく、中世・近世まで 種々のたら遺跡があったというが、今は静かな谷あいの集落の中に埋もれている。

西下野製鉄遺跡では 5 つの炉床と共に工房跡や炭窯砂鉄置き場などが見つかり、比較的低チタンの砂鉄を原料とした奈良時代初頭の製鉄遺跡と見られている。

この三河製鉄遺跡群で使われた低チタン砂鉄原料は千種川の川砂鉄などとみられ、「同時代の製鉄遺跡でありながら、隣接した佐用町の大撫山製鉄遺跡群が高チタンの製鉄原料であるとの対照的である」との調査結果に興味をつのらせている。

高チタン原料は精錬過程で形成したスラグがねばく、安定した鉄製造が難しく、低チタン原料に取って代わられてゆく。

後世 奥出雲でのたら製鉄が盛んになったのも、この低チタン原料が豊富にあり、大量生産が安定して出来たからだと言われている。

一方 古代製鉄の黎明期 丹後のたたら製鉄（遠所製鉄遺跡）では、近くに低チタンの原料がありながら、高チタン原料が使われている。

丹後の特異点と思っていたが、丹後に近い西播磨でも同じような事象がみてとれる。

まだ安定した高温が得られにくい時代には 他の不純物成分とあいまって、高チタン原料の有する比較的低温での溶融が和鉄精錬には好まれたのではないか・・・

私はむしろ高チタン原料を好んだ和鉄製鉄技術・産鉄の民がいたのではないと思っている。

(もっとも 後世 西播磨の和鉄製造もその中心は讃容から低チタンの千種へと移り、
また、低チタン原料のこの三河の地では後世まで和鉄 製造が続いてゆく。)

この西播磨は大陸から吉備・美作・奥出雲・丹後と畿内を結ぶ要衝の地。

そこに異なる製造プロセスの和鉄製造技術が時代を同じくして存在する事これこそがこの地を通る「和鉄の道」の重要性を物語っているのではないか・・・

高チタン原料から低チタン原料への移行がこの地で解き明かされるのではないか・・・

ここでどんなドラマがあったのか・・・

もののけ姫のイメージを思い浮かべながら 興味津々である。

2.2. 佐用町の中央にそびえる古代製鉄の一大生産地「大撫山」

- 今 頂上には西播磨天文台 -

千種川沿いに山間の徳久集落を抜け、南に流れ下る千種川と別れて北に佐用坂と呼ばれる峠道をのぼって佐用の町に入ってゆく。

幾つかの谷の出口の平地部中央に佐用川が流れ、その両側に街並と田圃があり、それを取り囲んでぐるっと山また山の狭い扇状地地形である。

街の北には街に接してどっしりと大撫山が構えている。

山また山ではあるが、山並みが低く視界が開けていて実に明るい。

中国山地に分け入って、兵庫県の奥の奥と思っていましたが、その陽気な明るさにビックリ。



大撫山頂上より 佐用の町 山崎からの中国縦貫道が見える 大撫山南東側 佐用の街へ入る中国道が見える

西播磨天文台の標識に従って、北に市街を突き抜け、また現れた中国縦貫道のガードをくぐったところから、高さ 436m 大撫山へのドライブウェイがついており、山へ登ってゆく。

ちょうど 野路菊の季節。

ドライブウェイのあちこちに野路菊の群生がみられる。途中 お地蔵さんが祭られたところが南面の展望台になっている。

そこからは南に広がる佐用の街並とそのむこうに果てしなく続く山並みが見え、やっぱり、奥深い山の中にある事を実感する。

ここには石碑があり、お地蔵様の由来と共にこの山が昔「鹿庭山」と呼ばれ、古代製鉄の一大産地であったことが記されている。



大撫山から南側佐用町を臨むる 2003.11.14.



大撫山中腹 地蔵堂横の展望台からの南面の展望

2003.11.14.

古代製鉄に関する記述はこの石碑のみにあるだけで、この山が「鉄の山」であった痕跡は見当たらない。

そこから 少し登ってゆくと頂上。

頂上は天文台を戴く良く整備された広い公園になっていて、360 度山また山 どこまでも続く山並みの展望本当に山また山 どこを見ても 山を実感する。

これは同時に夜になるとそれこそ眼の位置からどこまでもどこまでも広がる真っ暗な大空。全天星が輝く素晴らしい星のポイントと想像され、ここに天文台を誘致したこの街の人たちの眼力にもおどろく。



大撫山 東側の展望 2003.11.14.



山腹に整備されたロッジと公園



山頂の県立西播磨天文台



360 度山また山を示す方向表示板



北西 那岐山



北 後山・日名倉山



南東 雪彦山



【 大撫山 山頂からの眺望

2003. 11. 14. 】

この地が古代の播磨国風土記に

「山(鹿庭山)の四面に十二の谷がある。みな鉄を産する。難波の豊前の朝廷に始めて献上した」と記述されて、日本誕生にも大いに貢献した古代の一大製鉄地帯であることなど 全く忘れ去られている。明るい天文台一色の山である。

四面十二の谷 どこの谷からも鉄が出たと言う谷を見ながら、頂上にある天文台の周りを地図片手に一周。頂上付近のどこからでも 谷に降りれそうであるが、製鉄遺跡の場所など全く判らない。



野 路 菊



西播磨天文台と地元の人達



ドライブウェイ脇の赤土

公園整備をしている陽気な地元の人たちに製鉄遺跡の事を聞いて 色々教えてもらいました。

「 子供の頃には尾根につけられた旧道の山道のいたところで 磁石を引っ張って砂鉄集めを良くした・・。

また、ドライブウェイの途中からまっすぐ下に下る旧道を降りれば、小さな池のある堰堤にでる降りるとそこが永谷池のはず。 そこに製鉄遺跡が確かあって、今も調査しているはず。小屋がたしかある。

でも もう探さんかも・・・

」

大撫山南面の堰堤のある池 位置的には地図通り、永谷製鉄遺跡に違いないし。

また、ドライブウェイ脇の山肌では、真っ赤な土が帯状に連なっており、やっぱりこの山は鉄の山かも。

もう 和鉄の痕跡はさがせないものと思っていましたが、「四面 十二の谷 皆 鉄を産す」が現実味をもつ

て、永谷製鉄遺跡がある谷筋につけられた旧道を永谷池に向って下りました。
 大撫山は 360 度の山の展望が楽しめる本当に明るい山。
 山また山の中心にそびえ、低い山でありながら全く都会の裏山臭さがない。
 夜には星空いっぱいに星空が広がる事だろう。
 古代 産鉄の民がこの山を中心に世界へつながったと同様 今も天文台がこの街を世界へつなげている。

全く 知らなかった山ですが、四面十二の谷が広がる山 360 度山また山が続く大展望や山腹に咲く県花「野路菊」が素晴らしい。そして その山の周りの狭い谷に広がる街には清流がながれ、日本の原風景 「讃容の里」 和鉄のふるさとはいまもやっぱり輝いていました。今度は一度泊まって星空を見に・・・・。

2.3. 大撫山 南面の谷にある永谷製鉄遺跡



大撫山からまっすぐ麓の永谷池へ下る旧道 2003. 11. 14.



中国縦貫道の際 大撫山南面の谷にある永谷製鉄遺跡 全景 後ろは大撫山



永谷 B 遺跡

池の底に遺跡が眠る永谷池

杉林の中にスラグ原が拡がる永谷 C 遺跡

大撫山南面の谷にある永谷製鉄遺跡 (8世紀半ばから10世紀にまたがる重複遺跡)

頂上からドライブウェイを下ったところから、まっすぐに尾根を下る道に入ってゆく。
 車一台がやっと通れる程度のみちではあるが、ほとんど使われておらず、落ち葉が覆っている。
 全く人気のない谷筋の山腹につけられた道をどんどん下ってゆく。
 野路菊が美しい林の中の一本道。振り返ると頂上の天文台が見下ろしている。

引き返しもならず、ちょっと心配になりかけた頃 前方に池が見え、谷の出口の狭い田圃にクロスして中国道が前方をふさいでいる。これが永谷池か・・・・



大撫山頂上から永谷池への谷筋の道



手前の田・奥の池・左手杉林にまで遺跡がひろがっている
池のすぐ下に小さな作業小屋があり、人影があるのを見て
ほっとする。

やっぱり、この池が永谷池 そして下ってきた道の反対側
池の奥の林と池の下の田圃が製鉄遺跡跡だと教えてくれる。
資料ではここにはいくつかの製鉄遺跡が重複して存在し、
この池の底にも遺跡が眠っていて。

また、すぐ下の田圃からは3基の炉跡や砂鉄が出土。
池の西杉林の中はスラグ原。

永谷製鉄遺跡 2003.11.14.

この杉林の奥からも一基の炉跡が確認され、ここがもっとも古く8世紀半ばまでさかのぼれる可能性があるが、しっかりした確認は取れていないとの事。

この池からまっすぐ北に谷筋が伸び、大撫山の頂上が見える。



杉林の中にスラグ原が拡がる永谷 C 製鉄遺跡



杉林の中のスラグ原 永谷 C 製鉄遺跡

杉林の中のスラグ原で見つけた製鉄スラグ



大撫山製鉄遺跡群 永谷製鉄遺跡で 2003.11.14.

教えてもらった左手の杉林の中に入ると数段の平地になっていて、その奥が山肌の傾斜地になって、製鉄遺跡らしい面影がある。

足元の雑草の中 あちこちにスラグが散らばっている。

何時の時代のものなのか、また発掘調査後のもとのかも不明であるが、資料にあるスラグ原であろう。思いもかけなかった製鉄スラグとの出会いでした。見下ろす正面は古代讃容の里振り返って見上げる山は鹿庭山。

誰一人いない谷の中で、播磨風土記の世界に思いやっていました。

2.4. 佐用川沿いの大撫山製鉄遺跡群を訪ねて 播磨風土記「讃容の里」Walk



大撫山南麓に沿って佐用町より西へ 上月町へ抜ける佐用川沿いの国道 179 佐用町吉福付近

資料「播磨の鉄」(執筆 土佐雅彦)の調査記録によると大撫山の周辺には約 55 の大撫山製鉄遺跡群があり、播磨国風土記の記載どおりだとすると 6 世紀にまでこの地での和鉄製造はさかのぼれる事になる。

大撫山製鉄遺跡群をチェックした五万分の一の地図を頼りに大撫山南面側佐用川沿いを製鉄遺跡を訪ねて佐用の町から上月町へ「讃容の里」の Walk。

晩秋 大撫山をみながら清流沿いの山里風景はまさに絵画の世界から出てきたような日本の原風景そのもの。街道筋を集落の人々に話を聞いたり、川を覗き込んで砂鉄の存在を調べたり。また、田圃のあぜにおりたり、谷筋の藪を覗き込んだり

製鉄遺跡の場所特定は出来ませんでしたが、その地名や谷からの出口の地形に製鉄遺跡のイメージを重ねながら、古代 播磨風土記のどかな「讃容の里」Walk を楽しみました。

のどかな山郷の晩秋の夕暮れ時 穏やかな山並みをバックに清流が流れる田舎の夕景に見とれていました。

◆ 山平製鉄遺跡・鍛冶屋製鉄遺跡近傍



佐用町真盛より 製鉄遺跡が眠る山裾・山平の山端

佐用町真盛より 佐用川越しに山脇・山平の集落

佐用の街をでて、大撫山の南面に沿って流れる佐用川の川を見ながら上月町へ進む。

対岸の山裾を姫新線・智頭急行が走る。

この山裾に山平製鉄遺跡・鍛冶屋製鉄いせきがあるが、特定できなかった。

● 山平製鉄遺跡

8世紀後半の製鉄遺跡で厚いスラグ層が出土
複数の炉が在ったようだが、未特定

● 鍛冶屋遺跡

弥生時代の住居跡と重複して製鉄炉が出土
時期は未詳



鍛冶屋遺跡のある山脇 鍛冶屋地区

◆ 金屋中土居遺跡近傍

大撫山の西面に沿って流れる幕山川が佐用川に合流する金屋橋を北に幕山川に沿って 中土居・金屋の集落が広がる。

この幕山川と大撫山の山裾が広がる田圃・さらには谷に入ったところなどに製鉄遺跡があったと集落の人教えてもらったが、今は痕跡なし。

平安時代の製鉄遺跡と見られている金屋中土居遺跡では重層・重複した3基の炉床が出土。

金屋中土居遺跡もこの田圃の中に眠っている。



上月町大撫山西麓を流れる幕山川と

中土居・金屋集落



金屋大撫山西の扇状地

この中に中土居遺跡が広がる



金屋地区

奥に大撫山頂上が見える

◆ 播磨・吉備・美作の境 太平記の「杉坂峠」へ



太平記の杉坂峠 播磨と美作の境 今は峠の下を中国道がトンネルで抜けている

大撫山の西面の中土居・金屋地区を北に通り抜け、西に曲がって中国縦貫道にそって山間の峠道を登ってゆくと、西播磨と美作の境 杉坂峠。

太平記 後醍醐天皇・児島高徳の歴史が刻まれた峠。全くひと気のない静まり返った峠である。

今は中国縦貫道がトンネルで抜けてゆくため、全く往来がなし。 静かな峠である。

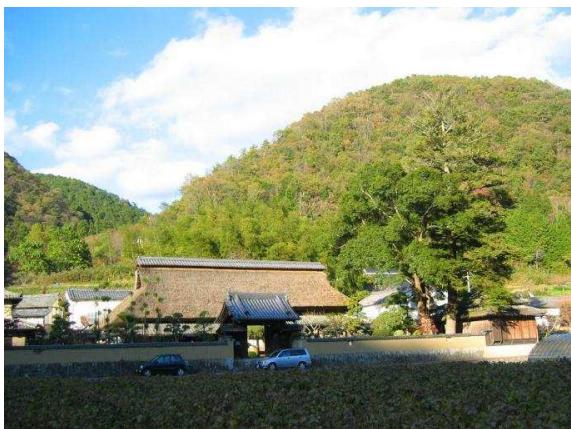
播磨の鉄の山と吉備・美作の鉄の山を結ぶ道 讃容の里も美作の里も今はほとんど和鉄の痕跡を見つけられないが、古くからこの峠道を通って日本各地へ和鉄の技術が伝播して行ったに違いない。

確証はないが、私にとっては「太平記」の史実よりも鉄の歴史の方がもっと身近に感じられます。

昔はこの峠を越えて幾多のドラマが繰り広げられたに違いない。

この杉坂峠のすぐ手前 皆田集落には絵の中から飛び出してきたような素晴らしい萱葺きの大屋敷がありました。

この地の大名主であった屋敷と土地の人に聞きましたが、この地が古くからの交通の要衝であったことがこの屋敷見て一人納得。素晴らしい屋敷でした。



杉坂峠下 皆田集落 萱葺きの大屋敷



播磨・吉備・美作の境 杉坂峠近傍

3. 播磨国風土記「讚容の里」Walk　まとめ



「(鹿庭山)々四面有十二谷 皆生鉄也 難波豊前於朝廷始進也」

山(鹿庭山)の四面に十二の谷がある。みな鉄を産する
難波の豊前の朝廷に始めて献上した

播磨国風土記(713年(和銅6年)頃) 讚容(佐用)の項



東 佐用坂から大撫山



大撫山の南面に沿う佐用川



西 上月町側から大撫山

大陸からの文化がいち早く入った古代の大國 吉備・美作・伯耆・出雲・丹後などと畿内を結ぶ交流路の入り口にあたる西播磨。

中国山地の奥深い里ではあるが、早くから開けた土地。産鉄の民がこの山中に分け入り、この地でいち早く和鉄生産が始まられた事を風土記は示している。

この西播磨で「製鉄の神 金屋子神 降臨伝承の地」で後世「千種鉄」として隆盛をきわめた「千種」については良く知っていましたが、同じ千種川水系にあって千種の南側に隣接する「讚容(佐用)」については知らず。播磨風土記の記事に接して出かけましたが、山また山の中に都会の喧騒からはかけはなれた独立した家並がある静かな郷でした。

古代 大陸からの和鉄精錬技術伝来の過程
で大陸・西日本の大國と畿内とを結ぶ要衝の地にあって和鉄生産がスタートする。



鉄精錬技術伝播・継承の真っ只中にあって、日本誕生に大きな役割を与えたであろう。

まさに大陸・西国から畿内への「和鉄の道 Iron Road」の本道がこの山深い中国山地を中継地として通っていたのである。この地でも丹後国であったと同様にどうも高チタンの製鉄原料の産地で生産が始まり、低チタンの製鉄原料の産地へと移ってゆく技術伝播の変遷が見られるという。



産鉄の中心地「鹿庭山(大撫山)」の頂上から 360 度山また山の景観と清流 佐用川の流れを眺めていると、眼には見えぬこの山郷の山間でこの地を通過して行つた産鉄の民にイメージが膨らんでゆく。



そういえば 周辺の吉備・伯耆・丹後の山々では産鉄の鬼伝説があるが、ここでは消えている。

早くから畿内に組み込まれ、一通過点だつたのか……それとも技術交流・交替がスムースに行つたのか…中国山地から南へ流れ下る千種・佐用川水系のこの地にはまだまだ知らないドラマがあつたろう。

今は本当に日本の田舎の原風景 静かな山里「讃容の里」。

古代製鉄のシンボル大撫山には日本一の反射望遠鏡のある天文台(今伊丹三菱電機で製作中と聞く)があり、全天見渡す限り星がきらめく星空の町。そして この南には現代技術の最先端 大型放射光施設が設置された播磨科学公園都市。鉄の伝来・伝播が日本を作ったように今この地から新しい発信がなされている。兵庫県の西の端「佐用」。私にとっては名前だけでよく知らなかったこの山里がなんとも暖かい親しみのある明るい街に感じられ、これからも何度も何度となく通いたいところ。

晩秋 佐用川に映える夕日に送られながら

2003. 11. 14. 夕 Mutsu Nakanishi

参考資料

「風土記の考古学」【2】播磨国風土記の巻「播磨の鉄」(執筆 土佐雅彦)

東洋文庫 145 「風土記」吉野裕訳 平凡社



播磨国風土記 古代製鉄の一大生産地「讃容の里」Walk

1. 播磨国風土記に見る西播磨の産鉄記事と和鉄の道
2. 讃容の里 鹿庭山(大撫山)製鉄遺跡群を訪ねて
3. 「讃容の里」Walk まとめ

【完】

